

これまでの気候変動交渉の経緯

COP19・COP/MOP9報告会

2013年12月18日 @日比谷図書文化館ホール

伊与田昌慶（気候ネットワーク）



国際交渉 年表

1992	国連気候変動枠組条約 (UNFCCC) 採択	問題認識の共有と枠組み構築
1995	COP1@ベルリン 「ベルリン・マンデート」採択	COP3で合意することに合意
1997	COP3@キョート 「京都議定書 (KP)」採択	排出削減義務のある条約誕生
2001	米国ブッシュ政権 京都議定書離脱表明	「京都議定書は死んだ」?
	COP7@マラケシュ 「マラケシュ合意」	KPの運用細則の決定
2005	京都議定書 発効	京都議定書の復活
	COP11/CMP1@モントリオール	次期枠組みの議論開始
2007	COP13/CMP3@バリ	COP15で合意することに合意
2009	COP15/CMP5@コペンハーゲン	次期枠組み合意に失敗
2010	COP16/CMP6@カンクン「カンクン合意」採択	「2℃未満」合意
2011	COP17/CMP7@ダーバン	「全員参加」の枠組み交渉開始
2012	COP18/CMP8@ドーハ	京都議定書第2約束期間合意
2013	COP19/CMP9@ワルシャワ	2015年合意への道筋に合意?
2015	COP21/CMP11@パリ	「2015年合意」を採択?

気候変動枠組条約（1992年採択）

- 目的
 - 「…気候系に危険な人為的干渉を及ぼすこととならない水準において、大気中の温室効果ガス濃度を安定化させることを究極の目的とする。」（第2条）
- 原則
 - 共通だが差異ある責任、予防的措置など
- 特徴
 - 締約国会議（COP）、補助機関会合（SB）などの交渉の場
 - 先進国が温室効果ガスの排出量を1990年代の終わりまでに従前の水準に戻すことは大気中温室効果ガス濃度の安定化に役立つことを認識して政策措置をとる。
 - 現在の締約国数は195（194の国と1地域）。
- 意義
 - 国際的な法的枠組みと原則、手続きを定め、気候変動対策のための国際協力体制を築いた。



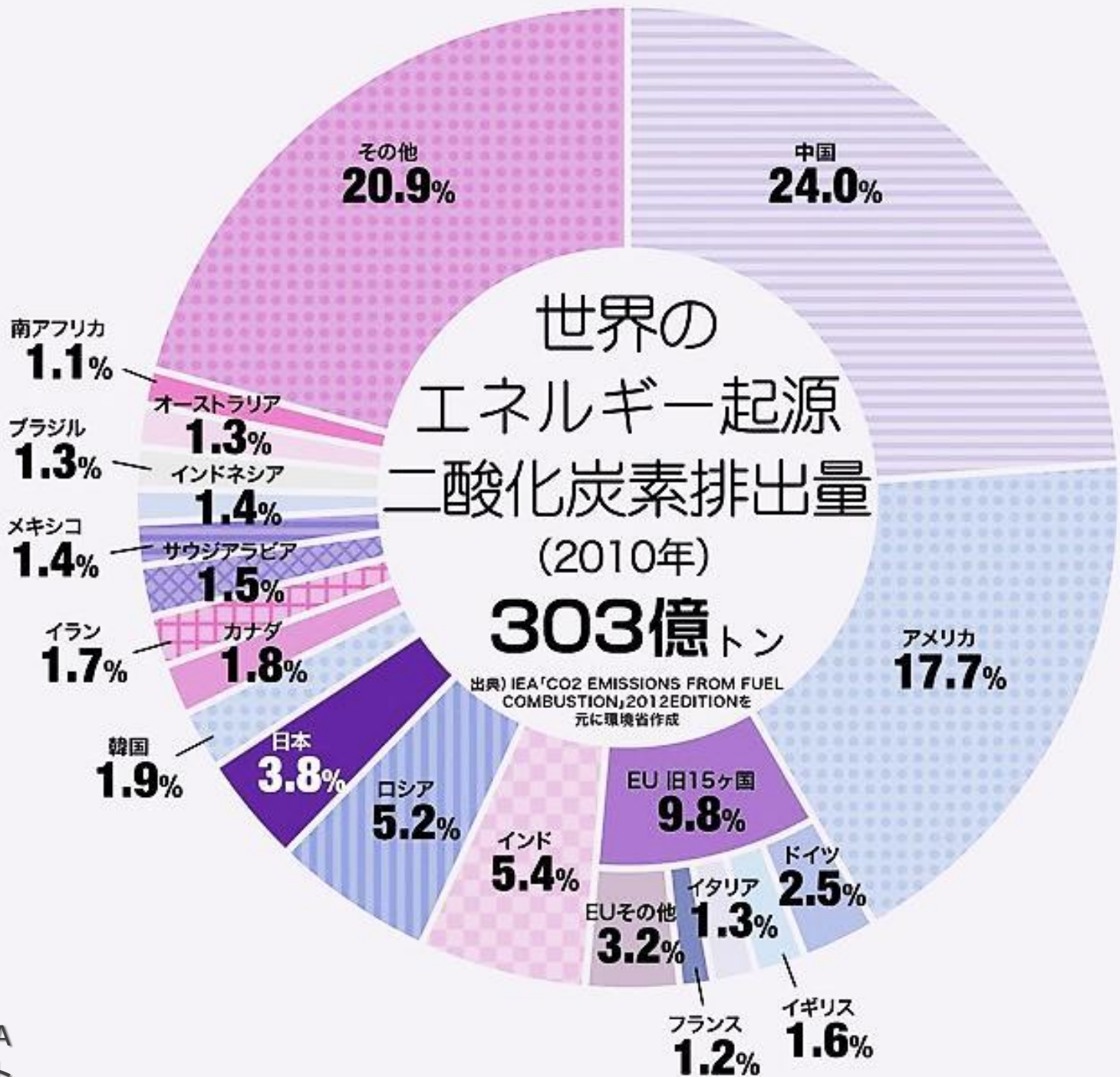
United Nations Framework Convention on Climate Change
Third Session, Conference of the Parties
Kyoto, 1 - 10 December 1997



京都議定書は、
歴史的転換。

京都議定書（1997年採択）

- ・ 概要
 - ・ 第1約束期間（2008～2012年）の間、先進国は法的拘束力のある温室効果ガスの総量削減目標をもつ。
 - ・ 日本－6%、米国－7%、EU－8%（1990年比）
 - ・ 途上国は法的拘束力ある排出削減目標をもたない。
 - ・ 市場メカニズム（京都メカニズム）を導入
- ・ ポイント
 - ・ 1995年交渉開始、1997年採択、2005年発効
 - ・ 現在は192の締約国（191の国と1地域）がある
 - ・ それまで放置されていた温室効果ガス排出が「管理」の対象になる
- ・ 課題
 - ・ 大気中の温室効果ガス濃度安定化には足りない
 - ・ 途上国の「参加」





排出割合
24.4%

CO₂

一人当たりの
排出量

5.6%

中国



17.7%

CO₂

17.4%

アメリカ



5.4%

CO₂

1.4%

インド



11.4%

CO₂

5.3%

ロシア



9.1%

CO₂

3.8%

日本



8.9%

CO₂

2.4%

ドイツ



11.2%

CO₂

1.8%

韓国

3.4%

CO₂

1.0%

アフリカ
諸国

どの国がどのくらい
二酸化炭素をだしているの？
一人当たりでは
どのくらいになるの？

世界の二酸化炭素排出量に占める主要国の排出割合と
各国の一人当たりの排出量の比較 (2010年)

出典) EDMC/エネルギー・経済統計要覧2013年版

ギガトン・ギャップ

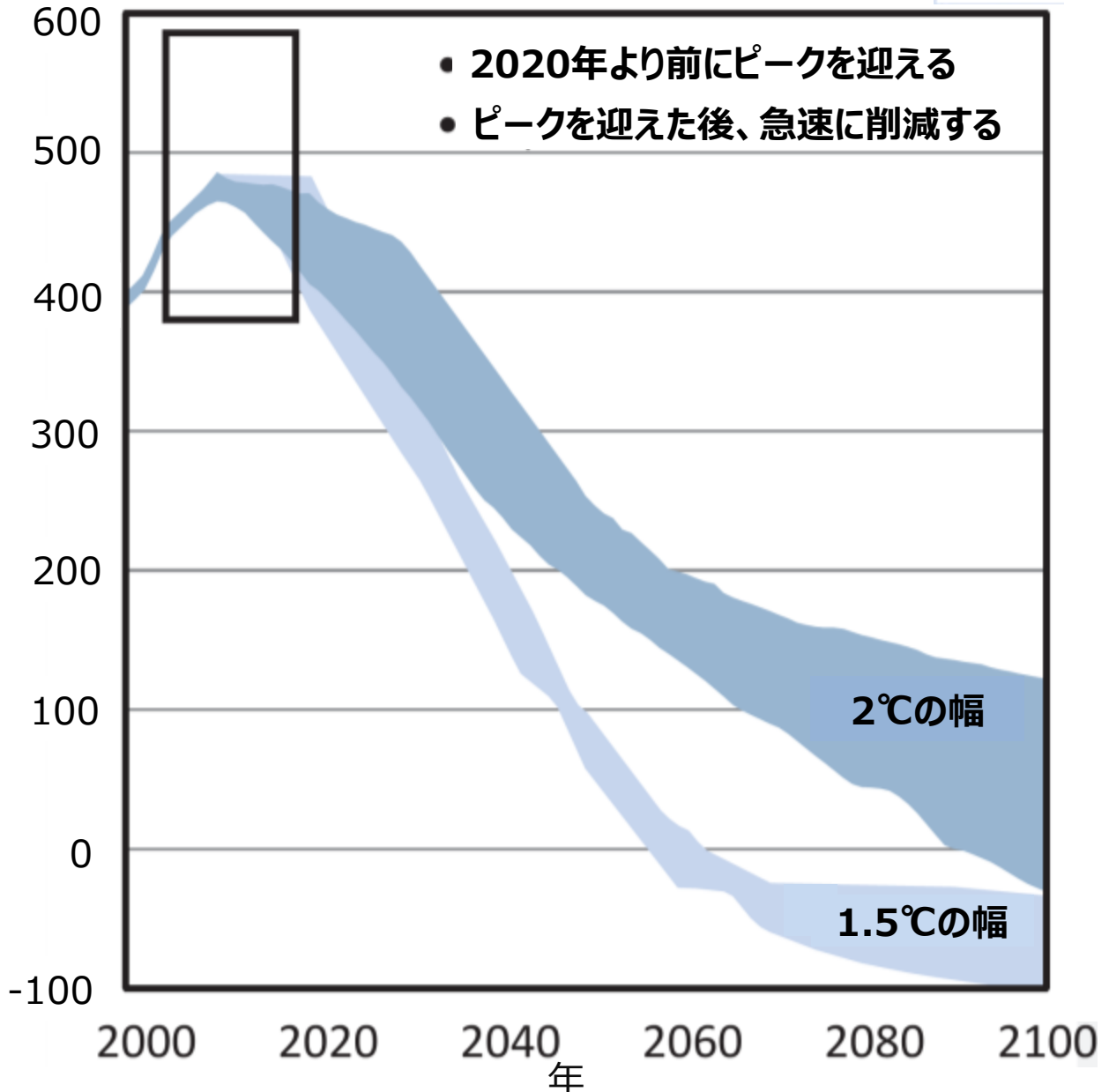
- 各国は「工業化前から地球平均気温上昇を2℃以下に抑制する」認識に合意している。
- 「2℃以下」達成のために求められる排出削減量と、現在の各国の誓約から見込まれる排出削減量の間には80億トン～120億トンのギャップがある。
- 技術的な観点から言えば、このギャップを埋めることは可能。

単位：億トンCO₂換算

No.	想定されたシナリオ	2020年 排出量	2℃以下との ギャップ
1	「2℃未満」達成	440	0
2	最大限の約束・行動+厳しい算定ルール	520	80
3	最大限の約束・行動+緩い算定ルール	540	100
4	最小限の約束・行動+厳しい算定ルール	550	110
5	最小限の約束・行動+緩い算定ルール	560	120
6	なりゆきまかせ	590	150

「2°C・1.5°C」のための排出量の見通し

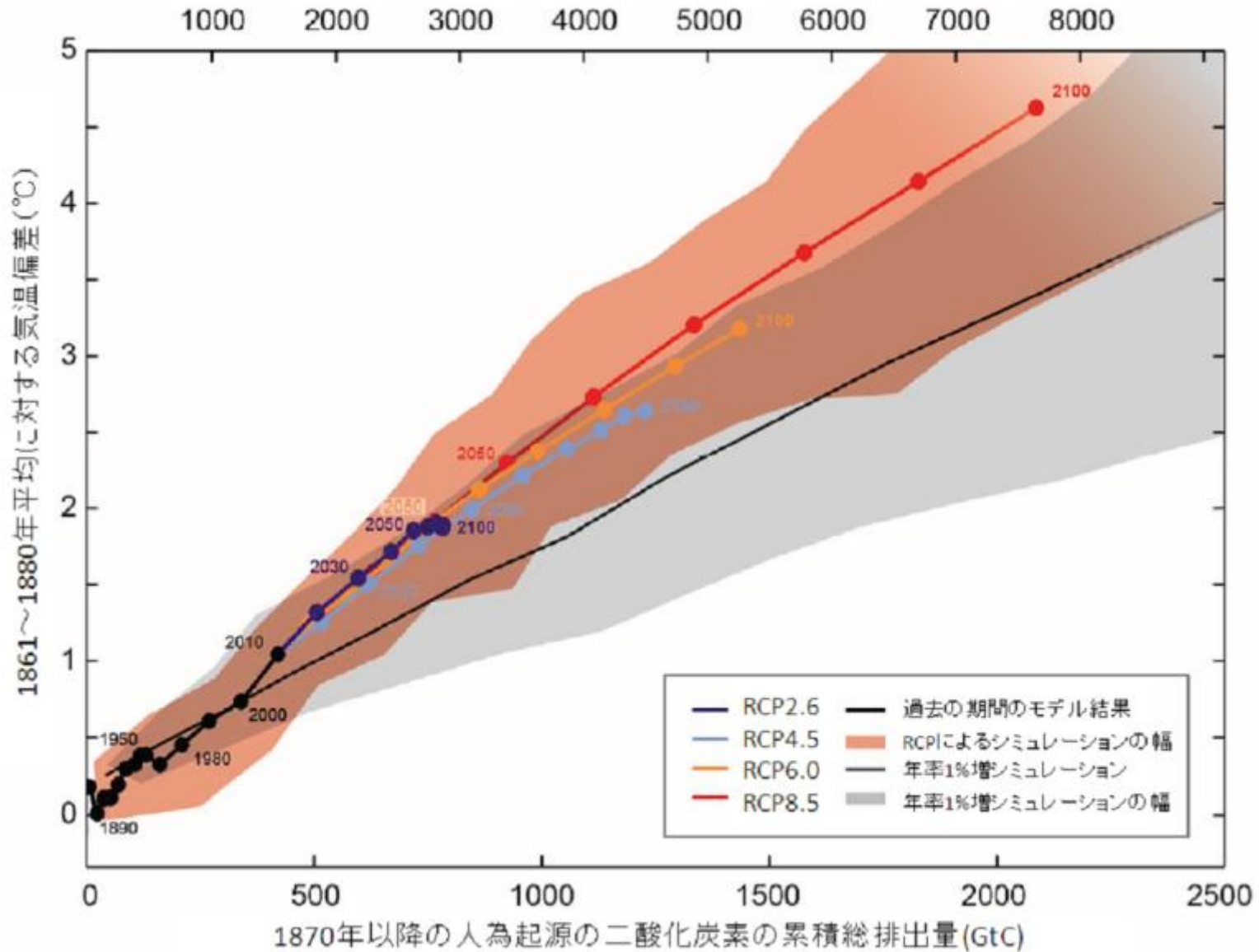
世界の年間温室効果ガス排出量
(億トン・二酸化炭素換算)



出典：UNEP, 2013, "The Emissions Gap Report 2013"

累積総排出量の含意

1870年以降の人為起源の二酸化炭素の累積総排出量(GtCO₂)



全ての国に適用可能な
2015年合意をめざす



ADPとは

- 名称
 - 行動強化のためのダーバン・プラットフォーム特別作業部会（ADP）
- ADPの交渉開始にあたって
 - 2℃あるいは1.5℃目標と現在の自主目標・自主行動のギャップに重大な懸念。
 - 全ての締約国に適用可能な、議定書、その他の法的文書、あるいは法的効力を持つ合意成果をまとめるための交渉を開始
 - COP21で「議定書、…」を採択してその作業を終える。その合意は2020年から発効し、実施される
 - 排出削減努力の強化についての議論を開始する。全ての締約国の可能な限り最高の排出削減努力を確保するような、ギャップを閉じうる行動の選択肢を探る

ADPとは

- 現在の議題
 - ワークストリーム1「2015年合意」
 - 2020年から実施する新枠組みについて2015年までに合意
 - ワークストリーム2「2020年までの排出削減努力の強化」
 - 各国の現在の誓約と、「2℃目標」を達成するために求められる排出削減量のギャップを埋めるため、2020年までの緩和の野心を強化
 - (これら2つの議題は、交渉の現実の中では相互に関連)
- 期待と不安
 - 公平で、野心的で、法的拘束力のある新しい国際枠組みに向けた交渉の場
 - 「2009年合意」の失敗を繰り返さない
 - 再び、国際合意に向けて機運を高めることができるか
 - 議定書か、その他の法的文書か、法的効力のある合意成果か？ (すでに「パリ議定書」の声も)



United Nations
Climate Change Conference

ADPの見通し

	2013年	2014年	2015年
UN FCCC	<p>ADP意見提出</p> <p>テクニカルペーパー等</p> <p>COP19</p> <p>野心強化の選択肢を探求</p>	<p>COP20</p> <p>交渉テキスト案の要素を検討</p>	<p>交渉テキスト案</p> <p>COP21</p> <p>新枠組み採択</p>
国際動向	<p>IPCC AR5 WG1</p>	<p>IPCC AR5 WG2/3</p> <p>UNSG サミット</p> <p>IPCC AR5 SYR</p>	
日本	<p>2020年新目標</p>	<p>IPCC 横浜会議</p>	

＜IPCC横浜会議・記念シンポジウム＞ だめじゃん、地球温暖化。異常気象が日常に!?

2014年3月、IPCC総会が横浜で開催され、気候変動の影響についてまとめられることになっています。世界で、そして日本でも各地で異変が起きています。本シンポジウムでは、私たちの身近に迫る気候変動について考えていきたいと思えます。

日程：2014年3月21日（金・祝）

会場：横浜市中心図書館ホール（定員200名）

出演：江守正多さん（国立環境研究所）、田中充さん（法政大学）、
瓜田勝也さん（北海道浜中町霧多布 ペンション経営・漁業）
山田一生さん（鹿児島県垂水市農家）
平田仁子（気候ネットワーク）ほか

主催：（特非）気候ネットワーク、（公財）横浜市資源循環公社

共催：横浜市中心図書館



ご清聴ありがとうございました。

ご質問・ご意見は気候ネットワーク
京都事務所の伊与田までお気軽にお寄せ下さい。

メール：iyoda@kikonet.org

電話：075-254-1011、FAX：075-254-1012

URL：<http://www.kikonet.org>

気候ネットワークは地球温暖化を防ぐために市民の立場から提案×
発信×行動するNGO/NPOです。気候ネットワークは多くの方々のご
参加・ご支援によって支えられています。どうか、ご支援をよろしくお願
いいたします。オンライン寄付・入会ページは次よりアクセスできます。

URL：<http://mp.canpan.info/kikonetwork/>

(右のQRコードからもオンライン寄付・入会ページにアクセスできます)

